

* 目次 *

第一章	師イエスの故郷・ナザレの村	9
第二章	師イエスのユダヤ教への疑惑と反発の芽生え	37
第三章	ナザレの村からの出奔・洗礼者ヨハネ教団への入団	48
第四章	洗礼者ヨハネ教団からの離脱とガリラヤ宣教の開始	57
第五章	ガリラヤの春・「旧約律法」の重圧からの民衆の解放	73
第六章	ユダヤ教指導者層たちとの対決	89
第七章	民族宗教ユダヤ教の否定と超克	102
第八章	北ガリラヤおよび国外への師一行の逃避行	122
第九章	エルサレムへの死出の旅路	132
第十章	エルサレムでの最後の日々	139

第十一章 師イエスの逮捕と死と復活	154
エピソード 私のささやかな思い	175
あとがき	190
《井上洋治アーカイブス》	
〈座談会〉「信」と「形」——『深い河』を手がかりに (遠藤周作／安岡章太郎／井上洋治)	193
〈書簡〉「先日の質問について」 (井上洋治から遠藤周作へ。一九九二年五月四日付)	225
井上洋治『わが師イエスの生涯』解説(広谷和文)	227
〈井上洋治 人と思想〉④(山根道公)	
鮮明に焦点が結ばれたイエス像——現代日本に生きるイエスの弟子の証言	240

第七章 民族宗教ユダヤ教の否定と超克

次に、民族宗教であるユダヤ教とはつきりと一線を画していくことを示している師イエスの姿勢と、師の語る「たとえ話」を紹介してみたい。これは悲愛というものが、民族とか国とか、善人とか悪人とかいう柵を乗り越えているものだということを師が示してくださっているという点で、極めて重要な意味を持つ物語とたとえ話である。

師が宣教の根拠地とされていたガリラヤ湖北岸の町カファルナウムに師がおられたときのことである。カファルナウムに駐屯していたローマ軍の百人隊長の一人がある日、師イエスのもとを訪れて来た。百人隊長とは、百人の兵士を部下に持つ将校のことであるが、彼の部下の一人が中風でひどく苦しんでいるので何とかいやしてはいただけまいか、ということであった。この懇願に気軽に主は応じられた。わかかった。行ってその人をいやしてあげよう。

これには頼んだ百人隊長の方がびっくりした。と、とんでもないことです、先生。先生がよく御存知のように、私は先生を私の家にお迎えするなどという資格のある者ではありません。私の部下がいやされるのには、ただ一言おっしゃってくださいればそれで十分です。(『マタイによる福音書』八章五節以下参照)。

ユダヤ人の町に駐屯し、ユダヤ人たちと付き合ひがあり、ユダヤ人たちの習慣を熟知していた百人隊長は、ユダヤ人たちが決して外国人の家には入らないことをよく知っていたのである。「モーセ律法」を知らず、

従って守ることをしていない外国人を「汚れた者」たちとして差別していたユダヤ人たちにとって、外国人の家に入るということは、とりもなおさず、自分たち自身も汚れてしまうことに他ならなかったからである。しかし師にとつて、悲愛の行為は、民族の違いや、清い者と汚れた者との差にこだわるはずのものではなかった。アッバは「悪人にも善人にも日をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる方」（『マタイによる福音書』五章四五節）であり、全世界の人々のアッバだからである。

この民族宗教であるユダヤ教の否定と超克のうえに師が告知された、すべての人のためのアッバの神の福音の重要さは、いかに強調されても決して強調されすぎることはない。

師は次のたとえ話を語られることによって民族宗教であるユダヤ教との違いを、当時の民衆のみならず、今の私たちにもよくわかるように説明してくださっておられると思う。

この物語は、一人の律法学者が師をためそうとして質問をつきつけるところからはじまる。

「先生、どうしたら永遠の命を受けつぐことができるでしょうか」というのが、彼が師につきつけた最初の問いであった。神の罰と呪いにあわずに、神ヤハウエのご加護のもとに入るためには何をしたらいいのか、という質問である。あなた自身はどう思っているんだ、ときり返された師に向かって、いかにも律法に詳しい者にふさわしく彼は答える。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさい」。

これは前半が『申命記』六章五節、後半が『レビ記』一九章一八節に記されている「モーセ律法」であつて、彼はこの二つを合わせて答えたのである。これに対して師は言われる。その通りだ。そのようにしなさい。

日頃から師の行動に対して不満と不愉快さを禁じえなかった彼は、この師の答えに割り切れないもの

を感じてさらに師を問いつめる。『では私の隣人とは一体誰なのですか。お見受けするところ、あなたは娼婦や徴税人なども隣人とみなしておられるようだが、まさか神さまの敵となっていて、神さまの隣人でもない彼らが、私たちの隣人ということはないでしょう』。

確かに『レビ記』一九章一八節には「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」と記されている。しかし、この律法学者が問題としたように、この場合の隣人とは、コンテクストをみるとわかるように、まず同胞である神の選民イスラエルの人たちのことである。神の律法を知らず、神の怒りを蒙るはずの外国人は隣人にははまらないし、娼婦や徴税人のような罪人も隣人ではない。神が悲愛の対象とはされないこれらの人たちは、隣人ではなく、人々の悲愛の対象とはならない遠い人たちなのである。

この律法学者の問いが、師の口から、そのような悲愛の対象を差別によって限定する考え方を根本的に否定する大変重要な次の「たとえ話」(『ルカによる福音書』一〇章二五―三七節参照)をひきだすこととなったのである。師は語りはじめられる。

『一人のユダヤ人が、エルサレムからエリコへの道で強盗におそわれ、半死半生で道はたに倒れていた。そこに一人の祭司が通りかかったが、かわりあいになるのがいやだったのか、死人にさわると汚れるという「モーセ律法」に忠実たらんとしたのか、とにかく見ぬふりをして通りすぎてしまった。しばらくして、エルサレムの神殿でいろいろな雑用の任にあたってあるレビ人の一人が通りかかったが、彼も道の反対側を通りすぎて行ってしまった。そのあと三番目に、一人のサマリア人が通りかかった。ユダヤ

1 前六世紀のバビロン捕囚以降、ゲリジム山に神殿を築き、礼拝を捧げている人々。イエスの時代にはユダヤ人とは深い確執があったとされる。

人とサマリア人は仲が悪く、ふだんは道で出会っても挨拶もしないというふうで、ユダヤ人はサマリア人を外国人同様に見なしていたが、そのサマリア人は倒れていたユダヤ人を見て可哀相に思い、介抱して、宿屋まで彼をとどけ、宿代まで払ってやった。

ここまで話してから、師は律法学者にきかれたのである。

「あなたはこの三人のなかで、誰が強盗に遭って倒れていた人の隣人になったと思うか。」

「彼を憐れんで助けた第三番目のサマリア人だと思う。」という彼の返事をきいてから、師は言われたのである。

「ではあなたも彼と同じようにしなさい。」

師は自分を基点として、悲愛すべき隣人は誰であり、悲愛しなくてもよい遠い人は誰であるか、という律法学者の質問には答えず、相手が誰であれ、自分を必要としている人の隣人になりなさい、それが悲愛というものだ、悲愛は民族の違いを超え、国の違いを超え、善人と悪人の違いをすら超えるべきものなのだ、と教えられたのである。

このたとえ話に、師がサマリア人を登場させられた意味は極めて重要である。師の福音は、民族宗教であるユダヤ教の枠をたく超えるものであることを示されたからである。

アッバがすべての民族、すべての国家、すべての人のアッバである以上、そこには選民イスラエルを特別に加護する『旧約聖書』が示しているような「聖戦」という考え方は存在すべくもない。アッバの悲愛のまなざしは、イスラエル民族に敵対するものを聖絶し、皆殺しにする神のまなざしではない。

《井上洋治アーカイブス》

〈座談会〉「信」と「形」——『深い河』を手がかりに

(遠藤周作／安岡章太郎／井上洋治)

「復活」の意味

——きょうは、遠藤周作さんがこのたび出されました『深い河』を手がかりにして、「信」と「形」というテーマでいろいろとお話をしていただきたいと思えます。

安岡 僕は『深い河』を読んで、遠藤が文学と取り組んできたごく初期から今日までのあらゆる要素をみんな含んでいると思った。簡単にいうと、キリスト教の信仰が遠藤の中では文学そのものとダブるぐらい大きな柱なんです。

遠藤の感化を受けまして、僕もキリスト教徒になったけれども、(笑)キリスト教というものは難しいというか、自分の中で、ある種の困惑を時々覚えさせられるのは、復活ということですね。「復活」がキリスト教の根だということは僕にも良くわかるけれども、同時に、それは僕にとっては、ある意味でどこか別世界のことでもあるわけです。時々井上神父のミサにあずかるけれども、それでも信仰宣言の中で、「体の復活を信じます」というのを唱えるとき、僕はなるべく無意識になろうとしている。(笑)体の復活を信じるという言い方、言い方だけじゃなくて、埋葬の仕方みたいなものまで、例えば朝鮮で戦死したアメリカ兵が日本へ運ばれてきて、ズタズタになった体を縫い直す作業が、ど

こかで秘密に行われている。そこでアルバイトをすると、物すごくいい金をくれるといううわさが、うそか本当か流れたよ。遠藤も聞いたことがあるでしょう。

遠藤 聞いたことがあります。

安岡 そういうことは、やっぱりキリスト教の復活ということ、おのおのの信者がみんな自分の復活を信じるところにあるんだろね。

遠藤 僕はやっぱり安岡と同じ疑問をずっと抱き続けてきたけれども、僕流にこういうふうに解釈している。

例えば井上神父の人生というのは、要するにイエスそのものじゃないけれども、イエスの教えを伝えるために、彼は一生捧げてきた人だから、井上という生きた人間のなかにイエスは厳然と生きているわけだ。

一方、「肉の復活で自分の体がもとどおりになる」、本来はキリスト教はそう教えていたけれども、だんだん肉の復活というのは、人間や、いろいろな地上的な現象の中にイエスの影が内在しているというふうに解釈すると肉の復活は納得がいくのです。今の僕は、そういうふうに解釈することになっています。これは確かにキリスト教の本来の肉の復活の意味からは少し外れているかもしれないけれども、井上 今安岡さんがおっしゃったみたいに、体を復活のためにつき合わせるとか、そういうのは僕も全然わからない。

だけど、それは僕だけではないんじゃないかと思うのは、このごろ、日本の場合、ほとんど火葬でしょう。例えば神父たちにアンケートが来て、今まで土葬にしていたけれども、火葬でもいいか、どっちだという問いがあったら、神父のほとんど全員がもう火葬でいいというし、僕もそうです。とい

うのは、いまのこの体と復活の体が直接に結びつくというのは、僕にもちよつとないですね。僕は、遠藤に近いかもしれないけれども、愛というのはコミュニケーションであつて、そのコミュニケーションとしての愛が体という場所を通して働くのだと思う。少なくともユダヤ人というか、彼らの考え方は、体が復活しないと、何か分裂病の魂がふわふわしているような全く一人ぼっちの感じがしてしまうのではないかと思う。だから、体のよみがえりといったときに、愛を成立せしめるためには、どうしても体が必要だというふうに考えたと思うので、この体とよみがえりの体とが直接に関係があるというような感じは全然わからない。

安岡 ただ、僕は、先にいって自分の意見を翻すようだけれども、例えば、この間、井伏〔鱒二〕さんが亡くなったでしょう。三、四年前からもう魂はなくなつたような感じだった。だけど、人はそこに存在している。この間まで存在しておられたわけですよ。そうすると、その人が亡くなつて、火葬に付されて、目の前で骨が砕かれたりなんかすると、僕はそれなりに非常に気落ちがする。上田秋成の『青頭巾』は、同性愛の話で、老いた高僧が若い未熟な僧を愛する。そのうちに愛している僧が死んでしまう。それを寝かせておいて、死んでも絶対に茶毘に付さない。そのうちにそれを食べちゃう。そういういかにも上田秋成らしい怪談ですね。

僕はそこには、やっぱり人間の形を持った体を周りで愛している者は、死してもなお残したいという欲望とか願望がある、そういうことは僕もわかるし、周りからそういうふうにいわれれば、自分も「肉体の復活を信じます」といいたい気持ちがあるのかなとは思いますが。

遠藤 僕なんか、あっちこっち手術を受けて体じゅう傷だらけだから、死んだとき、この体を消してしまいたいという希望が物すごくある。火葬場で骨になって出てきたら、みんなと平等になれると

〈書簡〉「先日の質問について」(井上洋治から遠藤周作へ。一九九二年五月四日付)

昨日のご質問に「酔がさめてから
考えてみました。実際のケースとして、
そういうのは聞いたことがないので、
昨日はあ、いう返事をしましたが、
理論的には可能なように思えます。
司祭になる直前には、修道会ならば、もう
必ず終生誓願をたてていますから…
そう簡単には退会させられません。

たゞ、聖職には、もし異端と判断されたら
何回となく、その考えを確かにするよう
すすめられると思います。多分最後は
従順の名によつて…
司祭でなくとも、修道者として受け入れる
ということは、会がその人の考えを認めた
ことになるでしょうから…
そして、もつと具体的には、
会にとどまりたいければ、試験のさい、そんな

昨日のご質問について酔がさめてから
考えてみました。実際のケースとして、
そういうのは聞いたことがないので、
昨日はあ、いう返事をしましたが、
理論的には可能なように思えます。
司祭になる直前には、修道会ならば、もう
必ず終生誓願をたてていますから…
そう簡単には退会させられません。

ただ実際には、もし異端と判断されれば
何回となく、その考えを確かにするよう
すすめられると思います。多分最後は
従順の名によつて…
司祭でなくとも、修道者として受け入れる
ということは、会がその人の考えを認めた
ことになるでしょうから…
そして、もつと具体的には、
会にとどまりたいければ、試験のさい、そんな

井上洋治『わが師イエスの生涯』解説

広谷 和文

1 出版まで

井上洋治神父は、二〇〇四年、『わが師イエスの生涯』を書き終え、二〇〇五年一月二〇日、日本キリスト教団出版局から出版された。処女作『日本とイエスの顔』から、二十九年目のことである。この間、井上が著わした多くの著作に描かれることは『わが師イエスの生涯』（以下、本書と呼ぶ）を指し、滔々たる流れとなつて本書に注いでいると言えるだろう。神父の棺には、遺言によつて『余白の旅』と共に本書が納められた。それは神父が心血を注いで書き綴つた師イエスの祈りであり、足跡である。本書のページをめくることによつて、私たちも、神父と共に師イエス巡礼の旅へと赴くことができるのである。井上の遺書とも言える本書は、一朝一夕になつたものではない。そこに至るまでの歴史があつた。苦心があり、苦勞もあつた。試行錯誤もあつただろう。一九九六年出版の『イエスに魅せられた男——ペトロの生涯』（以下、『ペトロ伝』と呼ぶ）の「あとがき」に井上は、次のように記している。

日本基督教団出版局の柴崎聰さんから、『イエスの生涯』をお書きになってみませんか、と言わ

れたのはもう七、八年もまえのことになるだろうか。実を言えば当時は私も、ぜひ生涯に一度は、『イエスの生涯』を書いてみたいと思っていたところだったのであるが、はたしてその力量が自分にあるかどうか、すこぶる自信がなかった……それで、イエスの弟子ペトロの目にうつったイエスの生涯なら書けるかとも思ったのであるが、……結局出来上がったのは、「ペトロの生涯」ということになってしまった。

このように井上はかなり早い時期から、「イエスの生涯」の執筆を考えていた。それが一足飛びに成らなかったことよって、私たちは『ペトロ伝』という、珠玉の一冊を手にすることができたのである。アツバの摂理と言うほかはない。

井上は『ペトロ伝』発行の九年前、一九八七年、『キリストを運んだ男——パウロの生涯』（講談社）（以下、『パウロ伝』と呼ぶ）を著わしている。これはパウロの生涯と使信を分かり易く記した好著だ。井上がよく、師イエスを理解するということは、パウロの視点からイエスを理解することだ、と言っていたことを思い出す。このように神父が、『パウロ伝』及び『ペトロ伝』を著わし、それらの著述を踏まえ、満を持して臨んだのが『わが師イエスの生涯』であった。つまり、「生涯シリーズ」三部作の集大成として、本書が書かれたのである。

私はこの三部作に、『法然——イエスの面影をしのばせる人』を加えて、「生涯シリーズ」四部作と呼んでも良いと思う。何故なら『法然』を加えることよって、井上洋治の世界のすそ野がさらに広がっていくのを感じるからである。法然に対する神父の敬愛の念を知ることよって、その祈りが「南無アツバ」へと結実していった消息も理解できるのではないだろうか。

〈井上洋治 人と思想〉④

鮮明に焦点が結ばれたイエス像

——現代日本に生きるイエスの弟子の証言

山根 道公

『わが師イエスの生涯』

『風』^{フネツ} 六一号（二〇〇二年九月）から「吾が師イエスの生涯」（一）と題して連載がはじまり、『風』六七号（二〇〇四年九月）の「吾が師イエスの生涯」（七）まで続いた時点で、「お詫びとお知らせ」と題した次の文章が同じ号に載った。

私が生涯を捧げた師イエスのお姿を、一人でも多くの方に知っていただきたいという長年の念願で書いていた『わが師・イエスの生涯』を、すこし大袈裟に言うことをおゆるしいただければ、生命をけずるような思いでやつと書きあげさせていただくことができませんでした。資料集め、構想ねり、執筆と、老令の私には三年ちかくかかってしまった労作でした。いままでも、この「書き下ろし作品」を少しずつ『風』にのせて頂い

ていたのですが、いざ脱稿してみると、私の年令のこともあり、やはりはやく本にしたいという思いにかられるようになりました。そこでまことに勝手に申しわけありませんが、『わが師イエスの生涯』の『風』の連載はこれで打ちきらせていただき、出上来がった本で「書き下ろし作品」として一気に読みいただくことをお願いいたします。少し時間がかかるかと思いますが……、どうぞおゆるし下さい。（後略）

二〇〇四年六月

井上洋治

こうして連載は打ち切られ、半年後に二〇〇五年一月に書き下ろし作品として日本キリスト教団出版局から刊行された。ちなみに、連載された内容は単行本の第五章までで、ほぼ残り半分が書き加えられたものであった。ここで「三年ちかくかかってしまった労作」とあるが、「三年」とは井上神父が七十四歳の二〇〇一年から七十七歳の二〇〇四年頃である。二〇〇一年二月には、『法然——イエスの面影をしのばせる人』を刊行している。そのあと向かったのが、「念願」であった『イエスの生涯』の執筆であった。

この執筆期間中の七十五歳の頃には、体力に自信がなくなつたため、二十六年続けてきた聖書講座を終了し、